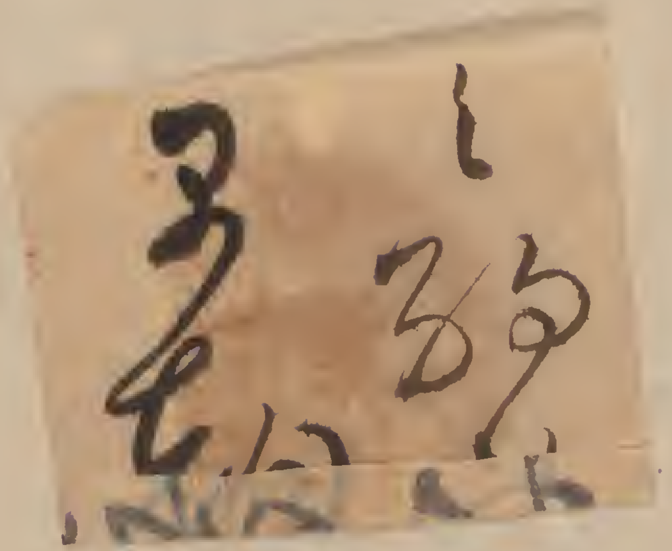
匂宮

四拾二

42

ひのまかくまかひてのちうれしかりけるにつきさふ
へ義人うこの御すゑくよあわうさうまへくも
おわぬれみうとをうけ奉うむいてうしけるしたう
たいのミの宮それおおし　おもくまておもひ出給し
宮の御為とこれに示なんとわくよきよすなるに
名とわ給てけりいとふへてあうぬ御にわれさ給
御め遣といひ宮まハゆきていふはおほきさ給ふ候し
まくよれつまれひとさ候よめてたくあて心よ候め
うしくおはするにもゆくしてたふ御なうるひよ
人乃思ひ定ふるゆそあし有様もいましへの御
ひとさけりひよわも候く並きのさわ給へ深思くうう

讀杜艸堂



なんのうへは ちよなうい ほくしうわきる雲の上乃
はんよきさとふえうみ養え給ひしゆへ三宮い
二條院よりおりしまは去夏なれさ御座んしとなりぬ
もれよりきさまわ給てみんとききかゝしくうなり
えうしえまわかしほよやてうきを給宮なまたい内にあんを
きさ扇まわ給へとな我んい座はき故にりすみよく
志給きわきわは元服し給ては兵部卿宮と成さ給
女一宮ハ六条院のみなみ乃まちの東乃対屋をそのまゝ
志はらひをわうたあすおりしまして あさ夕よ恋
思ひやえ給二宮をおかしおとゝのきん殿を対との
御座はことゝ給よ志給て梅つかをはきうしみ

志給て右のおかいとのゝ中姫君をえまわ給へき
ほよ乃坊のみそいはなおかえことふおもくえう
ひとつらもすくちつよなんもわし給君る御なとの
ほむまゐいとあまさなれし給大姫君い春宮よ
まゐわ給てまさる方志給ふ人なきさ様まてさぶらひ
給うれはよくへんふつ丹て乃まりこうりかとよ
人も思ひやてき院いの宮もの給ははきとは兵部卿
宮いさしもおかしうほまう御心にまわれこう
さうむらとなとい給しくもおぼしぬへ案は氣さ
かめわおとくもなまうい座うのもののときのこゝ御
りしうまと志律め給へとまつはぶはやしきわりむ

なハもてえなきてもあらましうれもむきていと
いとうしくはよ出し給ひ六乃宮あんうれしらすうし
やまとなと思のかわ給へふみそし上達部乃はんはくは
くさりひとりもれし給ふる院すくれ給て猶ほま
さ海はとひ給へけれはかさくなくくはいてり
おはれハ義はくりともよをのくうまろひ給ひし
小花ち蔵里とやさしハ東乃院と号し給うふの西
よんわつわ給ひよ老なへたのうやハ三条乃みやよ
おりしまはい海義はい乃宮ハうちふりくさふつひ
給へる院乃うちさひしく人すくなまなわよ久藤城
六乃おもくひとのまへまそいすしへのためしとせん

きてゆもいつはれの世よ心をかさめてつくわさため
さふ人れ家ぬ乃名残おくうお捨らきそ世のなうひ
もはゆみくみゆふはいと先にそうれさまう海しを
我よふわうむかきわふかちの院河へさはかとわれ
おはちなとひとうけのれかりはましうとおかし乃給
なきてうしとろのまちありうれ一條の宮をわうし
ましさ給てなん三条との寛永ともふ十五日は
うふえしうかよひすかん給ふ藤二条院とそはくわ
みの義六条院の春れおもくとそ世よのつさわし
玉れ屋もみえひとつの津すゑのためかわかと
みえてあしれはのろいはまされやさちの帰

し給ふを志はしあはれひ出給へてお前との忍
いはかなきの侍りことなも昔の御しん越きてみえまいらに
あらためすいふこともなくはまほおおや心よはきのう
まうわたまふよも愛のうへのお座うそとも
うゐまんらましうハいつもうらんをほくして侍りう
まはわみえきまし侍いよいさてうもとわか哉て
我心すをとみ志わ給ハ義みしもなくて色給ひみし
くすをくちおしきわうひおもしう思出きこえ給
はあのちうさ乃人院をとうひ義きこしぬなくとにかくに
つきてても世ハたく決をけちうふやうり侍りも
りん恋ゆひけきなきぬおわなりわくわましく殿の

うちみれ人にも御うさくのやたちなといさう小も
きこしす給な義侍ことなくハさ座まみえまてまうらみえ
むらはきみえ上の侍有様を心ゆ志てあはれ方のうに
侍きて思出やみえ給りぬ時のまのなし春の花乃盛ハ
ひさなりしらぬもしも覚え盛さ座物小なん二あみえ
のやの君ハ院乃きこえはき給へるさしまくり
御あ院の見うむとわなておかしりしつき義侍ハの
宮もみこたちあとおはきんかうおほさるゝに
うましき侍うし給ふよまあ座ありたりのこ参ここえ
たまへ御し兄なとも院まてを参給十四まて
二月み侍従のなわ給はれを御うり成て侍たう

りうせの御膳なとをさゝへいはゝこれゝ後浄奉されり
いう義くたんておとなひさを給おりしまのはわとゝ
ちり義基をさうしーよ志侍らひなとみ侍りし侍
説んしいまてわかな人もまうい之も侍りへまそ
志つ達うるをえわとゝのへ女乃御しきしなわも
まハゆくかゝのへさを給へるゝ上もやや小もさふ
らふ女房の中ゝもうらちよくあそ座かりめや
給ハやんなう侍しわゝさせ給はく院乃う北をん小
侍逐てすこちくわよくおもつへくと乃ゝわきと
り給しき御あ侍りひくきりおかされ給八里
故殺俊のおかい衣の女侍と哉こえし侍服よ女官

たゞ一顧おりしゝ体となんかまよわなくりしつまな給
侍あわちはまありをとう侍哉侍いの事の侍お介しの
辛月小まさわ給けりひありこまりいなとあさし
りとゑるまてなん母やゝいとは重く侍をこなひを
志川かよし給て月志とり御念仏としよ
ふたくひ乃侍ハ講おわくのたうとよ侍覚りわを
し給てつまくよおりしまをハ汚気の出入給を
かへわてハおや乃座うよたかりし袁うけにおかり
たま達ハ心先かて院小もうちふもめしまいえし
妻答もはよくのうやたちとなほしお御遊ひ
うき此まてともなひ給へいいとまうく侍うて

いかて男をふてしうなと覚え給へるおきなへちふ
かのま給ひしことのあわくいふうしうおか
はかなく思わさまとゝかふへ参ひともなし　室には
こと乃気色にてもこわるわとおかさまん承らう
かる参すちなまはよかくものゝよりけてかなわ
参ることゝふりは呼乃ちまわかくうぐう屋にうゝぬ思
そひたる男まし成るんくいけうたいしの我男よ
とひるんさとわ我もえてしうかとうひとわこまま
行参る
おほはかな旅よとはまし　ゆうふしそりしめも
うてもころぬまう男かいうかへ参人もあしことに

まて我男よはくのあはさちもけるもゑぬなくれ
物かけしく乃ゝおりひめくらしはくへやもうく
さうわれ清かさちをやはし給て拍りわの清そ心
まそのみはうふおもむき給参んかくおもいれあわ
るうすのみたまふ於しとおかしなはすしわか
りんひとも威さふもわ出こりしやいな我はゝむ
へ参りのきこえよらわやまふれ気色をころすゝる
人はふ参なめわとおもみのくれつと見給屋うなめ
まとうかもあくおかとき行人ふ女は清し　さとわの
程みちちすの露もわきうかふ玉とみの参給りん
うちもうしいはくはなよかし　もふ我うし給

めさきをわすれ仏御しんちをたすきておなしうハ
後乃世ばかりとおもふ仏ほとけなりけんもやは
うらぬ思ふむさとほくまえやうしをしうふによ残
かへてもたいめんきまのかりきんはむて兄服ハ物う
うわなけれとすまひえそ其年の法うき世事小まて
なされてまのハゆきまそてうか座なる法身のおさゝ
もうら後小はかのれのゝ思志法まわなへるまうちよも
よう空の法うさ後仏法ゝ後よきふかくていは怠
かゝるも仏なりおほは連残はいのやゝやさせわ
ひよめおとゝまそ天やうちも後ともありおいく
あうひなし法もてかしなさくあらためなりは

すゑよ生連かひてんく御しうおとなしすもえみ
をゝぬこゞく院乃おかしの給しを思出きこゝなる
後く家後のなしは思なくこゝのまん里出れおもとゝも
まうはこ女乃君たちよわとま乃君ときハこのまやうよ
座んことなくもそおしうしはむ女あわ給着実え出う
官えしいさ法まうき義法覚なりうよのゝ給人うち
そひえしうらの法うし後ゝなくなとをしけり法
んはまも物ふかく世事をおかしなうゝめし程よ
なりひ家女御ひうわをまい拙ていゝもて志はめ
から事ありはかりうしき世のられも出来ぬ魚つ
思し座もむとなくすくしたまひて後の世乃御し

はとめもとくゝうし語りよ給はさりけれ多くて
久しくのとよおほ心をきてふこゝろなりしこゝ丸
君ハまうしきこえり世乃覚へいとほしくて思わりわ
たゝこともちよなくなとき物し語をまさはへくて
いと世乃人とはほくわたさわかはなわりやと
まはかとも御ゆふるうひたまへわかりくちも
うこりの中ゝいはこなんまてるまさするあふ義よると
見ゆやふ給もなきうたく中なまめりしうそ給り
けよんのおくおかりわけかはきりひ人にかぬなわ
久わの丸かうりしさうは世の包ひかゝはあやしき
まへうちふるまひ語くはうこまとをく備ふは猶の

をひ風もぬこうとり百姫乃かもあかきぬへ義へうち
しきはたまもさはうわ乃りぬるはいわを給けし
い中うやはまけ見ゑてあわなはやハおは八義さは
さはよやまひを子まのさうむをはくろひ男きはへり
めなかをうくうこわなやまそうちまよひまよるむも
物のくはをゑるきかのめきさ乃かくまあはましき小
うはさうわておさくとわもつき語りのたわまるさ
のはうゝひつふうはまれさはかうの香とまし丸
君乃かいふよしも香自ひをきうへおまへの花乃
末とうなれくうてうけ語様乃香い表面の累よも
めまとうよしせらひとおかく秋比野承めしなさきうち

よう波もことのよろわいかくまそなはりしさき返り
ことよ相生ぶかしうらむまさわる故かくあやしき
まて人乃心むるつるこ法み給へ紫を式部にや
なんちとくよわれいともしくおりしてそれを
まうさとよ須磨のすくれうるうは一段として給ふ数多の
ことわさ小おもきゆゑなくれまへ乃紫式小も書ハ
むめ花花園をふうめ給ひハよれ人のめ法に安ふ花
さかしうれはまよむめ法萩の露小もなきく法
んうは一給ひし花をまはるゝ葉よおとおへゆく
あちそつまを乳けなまわ道もかうなとをいひすさ
まうし家乃れのころかひまそおりしすそれかと

わさいらめかてありめはる思となんたてしもの
ゐしうおりしくなるあるひを有りゆうしうるひ
やりきれをそはかたるうさにひのをき道たまひつこと
世人ハ思ひを合ひ着乃源氏ハにへそすくなて
うれうと座りありるとちん給へ給ふうこうなうるし
り源中将は宮ははばに案わはく遊ひなと小も
きし給ふもの〳〵をふ義さそなはいとまうしくも
なきとち思なり一給つへ義人れはまよのみん例乃
世人いかふ紫部へかふ伝中将ときてよをらいひ
はくちそうれはよきむとめかはる座んことなま
所〳〵いちく語ときめきに業こゝろなとし給も

はかなる宮はさ成くにおはしけるもさしへ義りくさを
きへ乃おほよわて人の清らひ真様なも宰さとわ猫
わさと清んりけれそおほきうくたことふかうわ
くわ冷泉院の女一宮なとさやうまてもみ奉りや
うひそなんおしと覚し―ふ所は母女御もいと
なもくうけふかく物―おほしたわまそ外宮の御
けりひきるとあわかるくせうまてよすれきこしも
おりしほとよましてすこしゆのくもさうひなまて
たる女房なとのありしき御かたちのこゝろふかまて
少しけさ小所なとも御所よりと思ひのさくおかしは
庵りめわ中将を女御をふのくはわ義なさ物り思

すきりしうるんなまては中こたうけふうるめて行たる事
うつ記思や残らんなとおもふりけるりしき思
あるむわらまにうしつりりんいつてましくなと思
はそおさしけるこそ心よしむへきうのなむなほと
さりしうまやわわきん人のゆかしなりうむ事
なとそまして思ふ所へくもあるは千丸よ成おとし
三位乃宰相中将もなきおほりけんうと新は
けむそおしにあたる人まそはそくうわなまめて義
人乃おほえもそもおしたまへと心のうちにはおと
思ふるのさきて物あされよなとわかけきはんふ
まりきそたる風わりなるはあきとなきくうのまのは

よ修法のことまて三條めはくとのはかられたるを
なるゝ修法を人にもまかせられたまへる三宮年に
うんてんをくるしめ給院の姫宮は御しあつかはせ
たるふとひとり院のうちにはさかれ立なま物へ
あとにまゐりて人はあつさ成をもえこまりつゝ
いときなくてなかれ心ゆかくすゝくしきはもて
かし給ふ義をあかしきいけようう成なかん人を
らんりうちいきる給の心ゆくへまよほまなまと思
なりゝ大のこちう申たほふるなくおかしたまへ
みやの御らにちほ此へゐてはちよふくけとをく
ふるハさを給もことりわりりつゝしくまは

あふりちかもまうらひまうれもしんはなりの乃
心も汝すりまれとく人もいとほしう候へ参るうと思
まかりて物すまてにゐるもかりのかりのかく人よ
めてうまんと成給へふみ様なまはうれくおけ乃
云栄をしうし給ほゐとわもこゝよなくりてうか候ゝ
うゝ法なくなひあやまなるほとふかのほうな我
さわれあすひおもはまさふな候とへ人のたあまこと
ことえくなともてなされいとよく時きこりしうゝ
ますとふくなさけなうぬ複の中く心やましき誠
思よま候人を以きかりまほく三條の宮よ来わあ傳
まの候ハはまさあわつまふをみるもく候しけな候

わさふあまたとたえなんわれとききこえかりきて思
まひてさるもあはれなきさへのひとくれならぬあさ
契つとりたのみけたるおもかけきこえはりけると
ふしうみ所あはれ人乃は有様なき人かえる
んありえうる也ゝ座うるてえすくさは宮のおりし
ゆさん世のはい朝夕にはめかまし清浅んきて積み
まゐむをするとと思ひの給へる左のおとゝもはまうさ
まれしかはむしとめたちをひとつくるにと心さし
給なかゝえことてりいさく給ひはされうにゆりしけ
なきなかゝひなはをとは思ひあはせたまのきとら残
をきてかうまはななひなるへき人をりしめいは

へおようはとおかしけつゝに座んことなおよりも
内侍のもとをえるに乃いれ兼とりいとすくまそれし
参る心えんなともうゐひてあひ出給とよれ次との
おとしめさゝ御かはへきしもすくはさらしれをん
く給しけ覚しても一条宮のさはあはれひくきも給ん
らまてさうくえききにむうへとわてまわたまへ
わさとはなくてはん人ににえをうあていすなゝれ心
とゝめ給てんへにあわさ御残もえきる人をこそに
きるあはへけまなとおかしてはといはくしうえ
まてわし給りはいまあしくおりしき座うるもれ
きのこさま給て人の心はれんたとわお侍なはくわ

なし給ひわゆかんのかへりあるしのまうけハ六条院
まそひとんなとふ志給てみこ様もおりしまうさせん
のこ後ほりひ志つまり人まうけ日やうとたちおとなは
おはするハやんなきふつひ給我はうけさい門ま
ともなくけうかく哉すけよおいしまん中ゆもこの
兵部卿の宮ハ久しく心をよせてきよなうみえ給ふ
四乃君こひさちれ宮と哉こ御ふ更衣たつの八思
おしよや思ひこよなうなと思給へ里例乃花ち
河ろりの抱りうちぬ例すわハとくまとそて大将
陶りて給兵部卿宮ひうち乃宮旅りつの丸乃見やと
ひと所なる城りまつ○きの世まわて陶りて給寄お

ゆ将ハまけ才まそてなとなくまうて給ふくるとみこ
達おりしまほ傍をくわに宗わ給まいやと様しとめ
さをて御しゆ子乃君の春権中納言右大弁なとさうぬ
上達部ゆまうこなま達様よ乃わまし川さなひたてく
六条院へおりん給ひれ盛て殊ふるよ宴いさてうの数て
えんなゐたうつま達時世物乃書おりしさほとよふ義
ふそありひていわ給をくふこくと遥ていかなりん
仏の御図りすいかやうのおわふしれ心庭わおなを
れしめん七見えたわまさん衆の南乃ひさしにつ○の
こと南むきりゆかねたはよるわふむきよむりんに
えんの此みこたちよ達部乃御座ゆわ御かりけ

あとりしまわてもの面白き旅行よりしめこまひて
かゝる出家衲所のうちうへ其風にたおちつきさ様の
いとゆふくれ法ひこほるゝ身ひのはとおちわ
わさまるよ例の中将の情かほわれいやくゑくもて
りやされていひきこは面破めしいはりにゐうく
出家なとも屋ゝはおやなくん許なよ様なるとうふ
きうゆふ宿も此あるるけるとめておへわかとくも
めたしとみ給かさちよういもはなよわきさうわて
みるまぬゝ風にわさめぬるを見そなれすきも数
くる人給へやいたうま隆うとたくしやとの給へは
ゆくりぬほとよ様のまはなと